

## 詩編第2編からの黙想

### 主なる神を避けどころとする幸い

一日を始めるとき、神の前に心をしずめ、聖書のことばから黙想しましょう。東福岡教会のある姉妹から日本バプテスト女性連合の『世の光』に従って聖書を読んでいるというお便りをいただきました。それぞれが工夫する中で、この詩編の黙想を用いてくださることもできます。まず、ご自分で詩編第2編をお読み下さい。声に出して朗読することも、静かに目を通すことも良いでしょう。

第2編は、ちょっと心がざわつく言葉で始まっていますね。そうなのです。この世界を支配する指導者たちに人々は期待してきました。愛と正義をもって民衆を導いて欲しい。しかし、その期待は裏切られてきました。それが、旧約聖書が示す「人間の限界」への気づきです。

そこで主なる神はいたたまれなくなり、6節で、「わたしは自ら、王を即位させた」と言われます。神ご自身が、です。「わたし」が強調されています。

7節には「お前はわたしの子／今日、わたしはお前を生んだ」と書かれています。これは、イエス様がバプテスマを受けられ、僕の道を歩み始められた時に、天から聞こえたという形で新約聖書に引用されています。(マルコ1:11)。私たちは「天」に心を向けていますか？真の王、愛と正義、真実で導いて下さるお方イエス様が来られたのです。なんと嬉しく、希望に満ちたことでしょうか！

この詩編は、イスラエルの「王の即位式」の時に、歌われたと考えられています。それゆえ、政治色の濃い詩篇です。第1篇が個人的な人間の生き方を問いかけ、主なる神の教え、聖書のみ言葉に従う幸いを教えている一方で、第2篇は、この世の支配者が問題にされます。人間が生きる以上、政治は重要です。先行きの見えない経済状況の中で、私たちは心がザワザワ、カサカサと苛立っていました。「今だけ、金だけ、自分だけ」の短期的利益追求の欲望社会は、何かオカシイと心の片隅で感じていました。そこに、新型コロナウイルスの感染拡大の不安です。わたしたちは、何に信頼して生きているか、どなたが世界の主であるのか、が問われているのです。

4-6節は言います。地上では人々が騒ぎ立ち、政治指導者たちは好き勝手を行っているが、神は静かに天の玉座に座し、歪んだ人間の悪だくみを笑い、また、憤っておられる。私たちの目には地上の政治的混乱、モラルの混乱しか見えないかも知れません。しかし、世界を支配しておられるのは主なる神なのです。「わたしに求めよ」(8節)に続き、イエス様に全権が与えられることを、彼の愛が人間の悪しき企てを打ち砕くと約束しています。ですから、地の支配者たちよ、「論しを受けよ」(10節)、「恐れ敬って、主に仕えよ」(11節)「おののきつつ喜び躍り、み子にひれ伏し、み子の足に口づけせよ」(11-12節)と勧めます。

この詩編は、結論的に、今や「目覚めよ」(新共同訳)、「賢くあれ」(口語訳)と言います。いかに優れていたとしても、人は決して神ではなく、人にすぎないこと、いかに優れたリーダーであっても、神の僕でしかないこと、このような自分の立場を悟り、主の「論し」(「戒め」)を受けることが大切であると。詩篇第1篇は「いかに幸いなことか」で始まりましたが、第2篇は同じ「いかに幸いなことか」で終わります。「主を避けどころとする人はすべて」(新共同訳)、「すべて主により頼む者」(口語訳)、ヘブライ語の *hasâ* は「避難する」、「保護を求める」ことを意味します。「主の所に逃げて行って、匿ってもらう」ということ、それこそ、幸いであると言います。今日もイエス・キリストを遣わして下さった主なる神の下に逃げ込み、避難所としましょう。一番の安全地帯です。そして、医療介護従事者、行政の責任者たちのために祈りましょう。神は彼等、彼女らを通して働いておられるのです。